

建築学生ワークショップ熱田神宮2027

architectural workshop ATSUTAJINGU

参加学生募集！

応募締切

5.21

Call for entry

創祀千九百年 — 熱田神宮

伊勢神宮に継ぐ国家鎮護の神宮として崇敬を集める聖地に於いて

「創祀千九百年」

2027 年 熱田神宮 開催

熱田神宮について

熱田神宮は、日本の神様である「天照大神（あまてらすおおみかみ）」から授けられた三種の神器、鏡、玉、剣のうちの一つである「草薙神剣（くさなぎのみつるぎ）」を祀られており、その創祀は 1900 年前に遡る皇室にゆかりのある由緒正しい神社です。熱田神宮には国宝級の宝物が数多くあり、神道に関する資料館も設備されています。また、熱田神宮の境内には、本宮、別宮一社、摂社八社、末社十九社が、境外にも摂社四社、末社十二社と、全部で四十五の社が祀られています。1377 年に「日本書紀」が奉納され、1560 年には、織田信長が「信長塀」として土塀を奉納した歴史も残っています。1860 年に名称が「熱田神社」から「熱田神宮」に変わり、現在に至ります。

開催

本開催は、公募した参加学生たちを 5 月 21 日（金）に選定し、10 の班に分かれて、6 月 12 日（土）に全国から愛知に集まり、現地調査を開始します。境内では、開催テーマとしての位置づけにもあるこの場所が持つ特有の力や意味を身体で感じ、その中から各々の班で発想の原点を見出していきます。さらに周辺地域の街歩きを繰り返し、いま現代に生き、地方で学んでいることへの意味をみずから問うていきます。

7 月 24 日（土）の提案作品講評会では、国内外にて活躍をされる建築家の先生方を中心とした講評者の指導のもと、日本における貴重で特殊な環境における場所性に根づいた実作品をつくりあげる意味を問い正され、翌日、7 月 25 日（日）の実施制作の打合せでは、地元の建築士や施工者、大工や技師、職人の方々に伝統的な工法を伝えていただく機会を得ながら、日本を代表する組織設計事務所の方々や多くのゼネコンに所属される技術者の皆様による実技指導をいただきます。

9 月 19 日（日）、この参加学生たちが制作した小さな建築を 10 体、熱田神宮境内に実現します。当日は、これらのプロセスを経て創出した建築空間を 1 日だけ、どなたでも体験していただけます。そして、建築・美術両分野を代表する評論家をはじめ、第一線で活躍をされている建築家や美術家の方々、世界の建築構造研究を担い教鞭を執られているストラクチャー・エンジニアによる講評者にお集まりいただき、公開プレゼンテーションを開催いたします。

学び

開催には、県内をはじめとした愛知周辺の多くの方たちや、これまでの開催地の関係者の皆さま、そして全国から集まる建築に関わる関係者や一般参加者に向けた発表を行います。建築のプロセスに胸を躍らせる 3 ヶ月。参加学生たちがさまざまな歴史をもつ古代寺院の伝統構法を学び、この文化に位置づけた解釈を生み、熱田神宮に存在し続ける建築様式に連なり、訪れた人たちの心を落ち着かせ、祈りを捧げるような空間体験と提案の発表に、どうぞご期待ください。



別宮拝殿



第三鳥居



神楽殿



信長塀



草薙館内観



くさなぎ広場



宝物館

Architectural Workshop ATSUTAJINGU 2027

開催場所 熱田神宮境内（愛知県）

熱田神宮の約 6 万坪の境内には、樹齢千年を越える大楠が緑陰を宿し、皇室を初めとした崇敬者から寄せられた 6 千余点もの奉納品が宝物館に収蔵展示されており、境内外には本宮・別宮外 43 社が祀られ、主な祭典・神事だけでも年間 70 余、昔ながらの尊い手振りのまま今日に伝えられ、初詣には毎年 200 万人以上の参拝客が訪れます。



現地滞在スケジュール

6 月 12 日(土)
現地説明会・調査（日帰り）

7 月 24 日(土)
提案作品講評会（1 泊 2 日）

25 日(日)
実施制作打ち合わせ（1 泊 2 日）

9 月 14 日(火) - 9 月 20 日(月)
合宿にて原寸制作（6 泊 7 日）

9 月 19 日(日)
公開プレゼンテーション

※ 参加申込の際に、全日程の予定を確保してからお申込みください。

7 月 3 日(土) 午後
各班エスキース(東京・大阪会場)

開催期間

2027 年 9 月 14 日（火） - 9 月 20 日（月） 6 泊 7 日

※ 合宿にて原寸制作
※ 9 月 19 日（日）神宮会館にて公開プレゼンテーション

参加費用

実 費（宿泊費、保険代、資料費等 ¥50,000 事前徴収制）

※ 現地までの交通費・食費は各自別途負担となります。
※ 開催地の有志の方々のご協力と、学生の参加費により運営をしています。

参加申込

ウェブサイトからお申込みください

※ 参加者募集期間 2026 年 9 月 8 日（火）～ 2027 年 5 月 21 日（金）23:59（必着）
※ 参加対象者 建築および都市、環境、デザイン、芸術など、これに類する分野を学ぶ学生および院生
【参加学生】定員：60 名程度（大学院生 10 名 + 参加学部生 45 名 + 運営サポーター 5 名）
10 グループを予定
ただし、定員を超えた場合は、主催者による選考をおこないます。予めご了承ください。
【運営サポーター】定員：5 名程度（参加・宿泊費無料 開催期間中）
開催期間中、合宿期間中の運営サポーターも募集いたします。（学部は問いません）
※ 交通費・食費 各自・自己負担

<https://ws.aaf.ac>

参加予定講師者

日本の文化を世界へ率いる方々を中心として、建築・美術両分野を代表する評論家をはじめ、第一線で活躍をされている建築家や都市計画家、コミュニティデザイナー、構造研究を担い教鞭を執られているストラクチャー・エンジニアによる講評。また近畿二府四県の大学で教鞭を執られ、日本を代表されるプロフェッサー・アーキテクトの皆さまにご参加いただきます。

石川 勝（プランナー 万博会場運営プロデューサー）	倉方 俊輔（建築史家 大阪公立大学教授）	長田 直之（建築家 奈良女子大学教授）
太田 伸之（マーチャンダイジングコンサルタント 松屋顧問）	稲山 正弘（構造家 東京大学名誉教授）	永山 祐子（建築家 永山祐子建築設計主宰）
建畠 哲（美術評論家 草間彌生美術館長、京都芸術センター館長）	腰原 幹雄（構造家 東京大学教授）	平田 晃久（建築家 京都大学教授）
南條 史生（キュレーター 美術館顧問）	櫻井 正幸（旭ビルウォール取締役会長）	平沼 孝啓（建築家 平沼孝啓建築研究所主宰）
中島さち子（音楽家 数学研究者 STEAM 教育家）	佐藤 淳（構造家 東京大学教授）	藤本 壮介（建築家 藤本壮介建築設計事務所主宰）
堀木エリ子（和紙デザイナー 京都美術工芸大学客員教授）	陶器 浩一（構造家 滋賀県立大学教授）	安原 幹（建築家 東京大学教授）
福島 良典（ジャーナリスト 毎日新聞社主筆）	青木 謙治（研究者 東京大学教授）	山崎 亮（コミュニティデザイナー 関西学院大学教授）
五十嵐太郎（建築史家・建築批評家 東北大学教授）	芦澤 竜一（建築家 滋賀県立大学教授）	吉村 靖孝（建築家 早稲田大学教授）

建築学生ワークショップとは

建築ワークショップは、建築や環境デザイン等の分野を専攻する大学生を対象にした、普段の大学生活では体験できないスケールで作品制作を行う地域滞在型のワークショップです。国内外にて活躍中の建築家を中心とした講師陣の指導のもと、開催地の歴史や地域環境を研究しながら、他大学生との交流の中でその場所における社会的な実作品をつくりあげる経験を目的としています。

“今、建築の、原初の、聖地から”伝えたいことを、空間として表現してください。

境内は、面積約 19 万平方メートル（約 6 万坪）、飛地境内地をあわせると約 29 万平方メートル（約 9 万坪）にのびります。本宮社殿の構造は、尾張造という特殊な様式でしたが、明治 26 年から現在のような神明造に改められ、平成 21 年には創祀千九百年を記念した造営が行われました。建築の道を歩み始めた次の日本建築を担う学生にとっては最も大切な実学として学び、保存修復や造営を繰り返すこれらの建築から、揺るぎない知己の基軸が築かれていくことでしょう。

【スケジュール】

5 月 06 日(木) 参加説明会開催(東京大学) 太田伸之
5 月 13 日(木) 参加説明会開催(京都大学) 吉村靖孝
5 月 21 日(金) 23:59 必着 参加者募集締切
6 月 12 日(土) 現地説明会・調査
7 月 03 日(土) 各班エスキース(東京会場・大阪会場)
7 月 24 日(土)～25 日(日) 提案作品講評会と実施制作打ち合わせ
24 日(土) 提案作品講評会
25 日(日) 実施制作打合せ
7 月 26 日(月)～9 月 13 日(月) 各班・提案作品の制作
9 月 14 日(火)～9 月 20 日(月) 合宿にて原寸制作ファイナル
14 日(火) 現地集合・資材搬入・制作段取り
19 日(日) 公開プレゼンテーション
20 日(月) 撤去・清掃・解散



拝殿



大楠

【制作内容】

“今、建築の、原初の、聖地から”～未来に受け継ぐために建築ができること
“唯一無二の環境を守るために、あなたの提案を実現化してください”

- ・フォリ（原寸模型）を地域産材(自然素材：木材、和紙、土、石など)の材料で制作
- ・リユース、リサイクル制作を前提とし、ゴミを出さない手法や構法、利用方法を探る

座 談 会 | ” 創祀千九百年を迎えられた熱田神宮 ” ～社の未来のために建築ができること 建築学生ワークショップ熱田神宮 2027

多賀頭(熱田神宮 権宮司) × 高橋守(熱田神宮 禰宜) × 小久保雅広(熱田神宮 禰宜)

× 腰原幹雄(構道家 | 東京大学生産技術研究所 教授) × 櫻井正幸(エンジニア | 旭ビルウォール 代表取締役 社長)

× 佐藤淳(構道家 | 東京大学 准教授) × 平沼孝啓(建築家 | 平沼孝啓建築研究所 主宰)



座談会の様子(熱田神宮 又兵衛 にて)

——— 全国の大学生が参加するこの建築学生ワークショップは、毎年、日本の聖地を舞台に開催してきました。歴史と場所の特性をはっきりと示す開催地で、周辺的生活文化を合わせて調査することにより、観光として訪れるだけでは知ることのできない街や地域との関わりや、建築を保全し更新されている造り方の技に触れ、制作を含めた実学としての地域滞在を行い、神聖な場所の静謐な空間からコンテクストを見出し、現場で建築の解き方を探るきっかけを経験していきます。この熱田神宮に祀られる御祭神 熱田大神(あつたのおおかみ)とは、三種の神器のひとつである草薙神剣(くさなぎのみつるぎ)を御霊代としてよせられる天照大神のことです。すなわち、草薙神剣の「正体」としての天照大神をいい、言い換えれば、草薙神剣そのものが天照大神の「霊代(実体)」としての「熱田大神」です。平安時代以降は、伊勢の皇大神宮(内宮)の祭神である天照大神を草薙神剣の正体とすることが通説となり、このことで伊勢と熱田は「一体分身の神」を祀る神社であり、日本国を支える神宮であるとされてこられました。このことから現在の建物は、伊勢神宮と同じ神明造。約6万坪の境内には、樹齢千年を越える大楠が緑陰を宿し、皇室を初めとした崇敬者から寄せられた6千余点もの奉納品が宝物館に収蔵展示されています。境内外には本宮・別宮外43社が祀られ、主な祭典・神事だけでも年間70余、昔ながらの尊い手振りのまま今日に伝えられ、初詣には毎年200万人以上の参拝者が訪れます。近現代における主要都市のまちづくりに欠かせない最も貴重となる「聖地」である清らかな場に身を置き、この伝統的な構法に触れ、この場所の特性を用いるため、大きく分けて「歴史」「場所性(地形)」「現代の問題」の観点から提案を求めます。

本日は開催地として多大なご尽力をくださいます熱田神宮にて、全国の参加学生にむけて導きをくださる、多賀権宮司、高橋禰宜、小久保禰宜をはじめ、東京大学の腰原先生、佐藤先生、そして毎年、私たちと併走したサポートをくださいます旭ビルウォールの櫻井社長、オー

ガナイザーの役割を担い続けてくださいます、建築家の平沼先生にもご参加いただき、運営統括の杉田が進行し、2013年に創祀千九百年を迎えられた熱田神宮開催についてお伺いいたします。皆さま本日はどうぞよろしくお願いいたします。

平沼: まず、熱田台地がなぜ熱田神宮の創建の場選ばれたのか、所縁をお聞かせください。

高橋: ここは当時尾張氏一族の斎場でありました。宮簀媛命さまは日本武尊さまが残された草薙神剣を現在の名古屋市大高町、氷上の里でお祀りしておられましたが、歳をとられて御神剣を祀るにふさわしい場所としてこの熱田台地を選ばれました。熱田台地は今の名古屋城辺りから南へ約9km伸びた、ちょうど象の鼻のように伊勢湾に突き出した台地です。その最南端に熱田神宮が鎮座しております。ここから南東へ直線距離で7～8kmのところ氷上の里が位置しており、当時はおそらく海であったと考えられますので、移動もたやすかったと思います。このような理由でこの場を選んだのではないかと推測されます。

平沼: 自然環境的な利点があつて岬の南端にできたということですね。

高橋: はい。標高約10～15mの森の台地が突き出るような形です。

平沼: 眺望も含め、すごい場所であるということは想像がつきます。

佐藤: 伊勢から近い場所であるということもかなり大きいのかもしれませんね。

腰原: 神社が創建される際には、山がご神体になっていたり、海や川などの自然の地形を意識された行事が行なわれることが多いと思う

のですが、熱田台地周辺の地形と連動して行われる行事や活動というのはありますか？南端に位置していることで海に向かって何かを行ったりすることがあるのか、もしくは森の中で大体完結しているのでしょうか。

高橋：そうですね、森の中で完結してしまっているのかもしれません。

平沼：何か現在にも引き継がれている祭典や神事がありますか？

高橋：祭典としてはないですね。当神宮の祭典神事のほとんどは農業に密接に関係しておりますので、自然の山や海と直接結びつきがあるかといいますと、難しいです。

佐藤：豊作を願う行事は、どのようなものがありますか？例えば天候が穏やかなことを祈るというものですか？

高橋：全国の神社で行われている祭典で、祈年祭・新嘗祭という五穀豊穡を願い収穫に感謝するというお祭りがあります。

佐藤：何か特徴的な道具を使われるなど、熱田神宮ならではの特徴的なものはありますか？

小久保：当神宮独自で執り行っている、他ではない形のお祭りには様々な歴史、由緒がございますので一つずつお話を始めると二日ほど頂くことになってしまいます（笑）。

腰原：衣食住の衣食の話ですと、神社さんが地域の活動として芋や綿を作ることや、お蚕さんや絹と神社とのつながりが強いように思うのですが、住の部分ですと、神社の建物には様々な特徴があると思いますが、建物に対する行事というのはありますか。住まいや木に由来するような行事というのはありませんか？

小久保：建築物をつくる前、取り壊す時のお祭り、後は取り壊しが終わって地ならしの際に行う地鎮祭、そういうお祭りというのはもちろんあります。

腰原：取り壊しが建て替えのスタートになりますので、地鎮祭よりももう少しお祭りをしなければいけないのではないかと思います、現在建っている建物を壊す時にいろいろ考える活動として解体祭を始めているのですが、そういった活動は昔からあるのですか？何祭りというのですか？



多賀頭
(熱田神宮 権宮司)



高橋 守
(熱田神宮 禰宜)

平沼 孝啓
(建築家 | 平沼孝啓建築研究所主宰)

高橋：取り壊し清祓、解体清祓です。

小久保：社殿の工事をするには、神様がそこにおられる状態のまま工事するわけにはいきませんので、まず神様にお遷りいただき、工事が一連終わりましたら、神様にお戻りいただくという流れになります。

腰原：現在、公共建築をつくる際は、特に宗教の話や地鎮祭、安全祈願も「祭」をつけるなという雰囲気になっているのです。昔は地域の祝いごととして、地鎮祭から始まって立柱式、上棟式など、個々の建物をつくる時に多くの人に関わってもらい、なおかつそれを皆で分かち合うという文化でした。ですが、最近は公共建築で余計なことをすると怒られてしまうのです。そこで建物をつくることに皆で盛りあがってお祝いしていた感覚を、もう一度取り戻したいなと思っているのです。

佐藤：清祓というのは私も聞いた事が無いのですが、地域特有の行事ですか？

小久保：いいえ、そのようなことはないと思います。例えば具体的に建物があって、これを取り除くという事で壊す時に行うのが、解体清祓。木を切る時には伐採清祓。例えば井戸を埋める時は井戸をお祓いして埋めますし、建物ができた後は入居の清祓をします。全国的に行われていると思いますよ。

腰原：最近あまり行っていないのだと思います。先日飛騨に行った際、住まい手が変わる時も家主が変わりましたという宣言をするようなお祓いを行っていましたが。

高橋：入居清祓ですね。

小久保：例えば厄年のご祈祷というのもの、来る人と来ない人がいますよね。もちろん家内安全でもそうです。ご祈祷を受けなかったらどうなるのかという、信仰の問題もありますから昨今は行政としてはなかなか判断が難しいのだと思います。

腰原：信仰してはいけないというのが行政の意向ですね（笑）。

平沼：この場所に熱田神宮がつくられて、周辺の町はどのように発展してきたのでしょうか。

小久保：重要な交通の要所として、人が集まってきたのだと思います。

「麒麟がくる」という NHK の大河ドラマの中でも、熱田の港の発展が描かれていました。想像ですが、大高の氷上の里から当神宮を見ると岬に聖地のような場所があり、そこで祭典が執り行われ、そこに人が集い、時代の移り変わるごとに交通の要所になっていき、門前町が形成されたという事なのではないでしょうか。

佐藤：このワークショップで、学生達がここで構築物をつくる時、コンセプトを考える時のきっかけとして即物的なところから、歴史や神聖なことにたどり着くようなことをお聞かせ願えればと思います。例えば材料になるものや道具、自然など、何かこの境内の中で大事にされているものをいくつか挙げるとすると、どんなものがあるでしょうか？

高橋：第一に考えられるのは森の保全、社殿をどう守るかということになると思います。そういう意味で森や樹木は大事ですね。

佐藤：例えば、大楠が樹齢としては一番長生きしていると思うのですが、焼けたりしたことはありますか？

高橋：雷も含めいろいろありますね。七本楠と言われ、樹齢は千年以上と伝えられています。今は3本ぐらいが残っています。

小久保：大楠は御神木にあたる木なのですが、弘法大師がお植えになられた楠が7本あったということで七本楠と言われております。その内の1本だと確実に言われているのはわかるのですが、他の6本はよくわかりません。よく似た大きさのものはあります。名古屋市が今から40年以上前に調査した時には、巨木の中の7-8本が当神宮にあるというような調査結果が出ていました。楠が非常によく育つというのも土地柄のようです。

佐藤：区別がつかないくらい立派な楠がたくさんあるということですよね？

小久保：雷が落ちたのか、枯れてしまったのかはわからないのですが、大きい株が残っている場所はたくさんあります。

佐藤：こちらの社殿に使う木材はその楠木を使われることが多いのですか？

小久保：産地は別です。近くに堀川という川がありまして、木曽檜を貯木していました。尾張藩は木曽檜を管理しており、この地はどうも昔からそういった関係がありまして、当神宮の造営は木曽檜を使う場



腰原幹雄
(構造家 | 東京大学生産技術研究所教授)



佐藤淳
(構造家 | 東京大学准教授)

合が多いですね。

佐藤：堀川は川の名前ではないのですか？

小久保：堀川は名古屋城のお堀に水を入れるための川のことを指します。歴史的に熱田の地と木曽檜はつながっている感じはしますね。

平沼：それは何か考えるヒントになると思います。

高橋：楠は木偏に南と書きますが、南方から来たと言われておりまして、あまり建築材としては適していないので、だから残ってきたのではないかと想像できます。

平沼：権宮司さまからも、何か学生たちにコンセプトのきっかけになるようなお話をいただけないでしょうか？

多賀：最初に戻ってしまいますがご創祀のお話について、確かに想像することしかできないのですが、古代の地形から、この地域の形をまず勉強してもらって今の話もわかってくるのかなと思います。古代の終わりから名古屋の地域の形はだんだんと変遷してきており、現在の名古屋とは全く違う形なのです。海の中に飛び出した岬のような半島が何千年前からあり、熱田台地は地盤が固く、しっかりした土地でした。その他のところは後にできていますので、どうしても柔らかい土壌になっています。古代祭祀などを行う一族がお祀りする場所、神様をお迎える場所としてなぜふさわしいと思ったかと言いますと、やはり当時は自然が一番だったのですよね。人間の感覚としてここが一番相応しいとすぐに浮かんではいるのではないかと思います。時代が変わって名古屋城は、江戸時代になぜあの場所につくったのか。それはやはり熱田の宮があったからでしょう。我々以上に自然の力を感じる古代の人たちや江戸時代の人たちがいて、お城をつくれれば尾張は支配できるというような考えもあったのではないかなと思うのです。その後城下町ができ、繊維問屋街が発展していることを考えると、古代の人たちが自然を感じて、ここは神様を迎える場所だと考えた。だからこそ守り伝えており、もともとあった手つかずのままの自然の木のままで森が残っています。またさまざまな建築のお祭りの話もありましたが、やはり一番わかりやすいのは、お伊勢さんの式年遷宮にまつわるお祭りだと思いますが、多分皆さんがご存知ないお祭りがたくさんあるのですよね。そのお祭りの名前から調べていかれるといいのかなと思います。建築とお祭り、神社とお祭りというキーワードが根本になるのではないかなと思います。清祓についても、やはり地方での特色がありますので、清祓という以外の名称で伝わっているの



小久保雅広
(熱田神宮 禰宜)



櫻井正幸
(旭ビルウォール 代表取締役社長)

ではないかと思います。

佐藤: それでは古代地形と、古代祭祀を学生たちに調べさせましょう。
宿題にしますと書いておいてください(笑)。

全員: (笑)。

腰原: やりすぎてしまうと、建物をつくらなくなるので気を付けないと(笑)。

多賀: 戦争でほとんど焼けておりますので、当神宮の境内には古代の建物がほとんど残っていません。建物としては今のご本殿も、お伊勢さんから頂戴したご本殿ということになります。

佐藤: 形も元々あったものと違うものになっているのですか？

多賀: わからないのです。絵として書かれているものを見てみると、神社の建物といえますと校倉造的なものしかないのです。神社建築でいうと、出雲大社造や住吉造など色々な造りがある。そこには土地柄としての特色があると思いますね。

腰原: 神明造の前が尾張造と呼ばれていますが、その頃の特色というのは残っていないのですね。尾張造というのも後に尾張造と呼ぶようになったということでしょうけれど。

小久保: 私の知る限り、神明造や大社造、流造というのは、社殿構造ですよ。尾張造というのはどうも建物配置の話で、その遺構を感じさせられるところはあるのですが、そのものが残っていないというのが現状です。

平沼: 再建される時代ごとに形態も移り変わってきたということですね。

小久保: 再興や修理をしてきたことで、当神宮の社殿、建物というのは造りがバラバラになっており、何造りかわからないものもあります。このような神社は少ないと思います。お伊勢さんだと神明造ばかりですよ。他の神社だと流造ばかりだったり、大社造ばかりだったりします。混在しているということが当神宮の歴史なのです。全部を壊すのではなく、残してきたのでしょうね。



座談会会場（熱田神宮 又兵衛）

平沼: 式年遷宮もありませんし、いかに現代的に、多様性を受け入れてきたかということですね。

櫻井: 1900 年いろいろなことがあった中で造りが混在したのは、変化を受け入れる気質、先を読む力があるのだらうなと思いました。あえてあるものを壊して何かに統一するということは無駄なことも含まれるかもしれません。その時代にあったものを取り入れながら、大事なことを引き継がれてきたのでしょうね。

腰原: 地域の産業に繋がる刀鍛冶がいらしたり、金属に関することや文化があって剣の伝説がよりリアルになっているのでしょうか？

高橋: 周辺に鍛冶屋さんが多かったということを聞いたことがあるのですが、ここから北へ 2Km ほど行きますと鍛冶屋の神様である金山彦命を祀る金山神社があり、現在も金属関係の会社が奉賛するなど崇敬を集めております。それが御神体とどのように関係するのかについてはわかりません。

平沼: 熱田台地は起伏が大きいですよね。例えば豪雨の対策もなされているのでしょうか。

小久保: 2018-19 年頃にボーリング調査をしたところ、やはりこの熱田台地の土地は地盤が固くていいところを選んでいたとわかりました。雨のことにしても社殿で水がどう流れるかが重要ですが、一番高いところに社殿があり、南に下っていくと低くなっており東西に蒲鉾状になっている。社殿を土木の専門家が見ると、建物から雨が落ちたらきちんと流れるような勾配がつけられているということです。ただ、今これを人の手でやろうというのは難しい。他にも火事が起きた場合、これだけ森があると燃え移らないかと考えるのですが、昔から大津通と 19 号線という大きい通りが防火帯の役割を果たしており、火は防いでいます。やはり昔の人はいい所を選んでいたということですね。

平沼: このあと境内のご案内をしていただく時に現地でもご説明していただきたいと思います。引き続きよろしく願いいたします。

(令和 6 年 2 月 6 日 熱田神宮 又兵衛にて)

———大変貴重なお話をお聞かせいただき誠にありがとうございました。本日の内容が、後進で建築や環境、美術やデザインを学ぶ参加学生にとって、とても貴重で意義深いものになると感じております。そして将来、この場所で開催した意義に継いでいくような、提案作品を募りたいと思います。今も歴史環境を感じる貴重な聖地を読む経験も、建築空間で自らの表現と制作する体験と、令和の日本を代表する建築家や構造家、全国の大学で教鞭を執られる先生方の厳しくも愛のある指導を受けることも、生涯の記憶に残るような幸運であったと想い返すことになる、貴重な機会となるでしょう。この大切な記憶がまたひとつ増えるような取り組みに、深く感謝をしています。

聞き手: 杉田美咲 (AAF | 建築学生ワークショップ運営責任者)